

# 「染色あそび」を中心とした主体的な表現活動 ——造形あそび、そのひとコマの風景——

The spontaneous expression of Arts and Crafts on

"Someiro-Asobi"

: An example of Formative Play

林 泰史

Yasushi Hayashi

## はじめに

2018年度より新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が施行された。その中では、3歳以上の幼児期の施設での教育を「幼児教育」とよび、(一)育みたい資質・能力(ア)知識及び技能の基礎(イ)思考力、判断力、表現力等の基礎(ウ)学びに向かう力、人間性等、(二)幼児期の終わりまでに育ってほしい力、において共通の記載がされている。目標においても、保育所の基本原理である「家庭養育の補完」に基づいた「生命の保持及び情緒の安定を図る」が加わる以外は同一であり、保育内容の5領域も、幼稚園・保育園・認定こども園の3歳以上については同一である。これは、小学校学習指導要領が2020年に大きく改訂されることを受けてい

ると捉えることができる。また、幼児教育が子どもの連続的な発達と、小学校以降の生活・学習の基盤の育成につながることを配慮すること、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすべきとされており、幼児の自発的な活動としての遊びが心身の発達の基礎を培う重要な学習であること(幼稚園教育要領)、子どもの発達における遊びの重要性について(保育所保育指針)記述し、幼児教育は環境を通して行うものであり、遊びを通しての指導を中心としたり、総合的な保育を行ったりすることの必要性を示している。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園いずれも、5歳児だけでなく、4歳児、3歳児において意識され、5領域にわたって指導・保育がおこなわれるようにしたい。3歳

児、4歳児それぞれの発達段階にあった支援の積み重ねが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながり、さらには、小学校との子ども像の共有化が図られることで、幼児教育と小学校教育との接続がより強化されると考えられる。

具体的に、幼児教育において育みたい資質・能力は何かというと、(ア)知識及び技能の基礎＝遊びや生活の中で、豊かな体験を通して、感じたり、気付いたり、わかったり、できるようになったりする、(イ)思考力、判断力、表現力等の基礎＝遊びや生活の中で気付いたり、できるようになった(ア)を使いながら、考えたり、試行錯誤したり、表現したりする、(ウ)学びに向かう力、人間性等＝まわりの仲間と共有したり、協働したり、追求したりして、主体的な活動ができる、という資質・能力である。「生活に結びつく『造形あそび』」の本実践において、(二)幼児期の終わりまでに育ってほしい力、の観点で検証しながら、この資質・能力が形成される過程を考察したいと考える。

### 子どもの活動について

#### 題材について

「たのしむぞ そめそめ大作戦ーやまももの実を用いた染色あそびー」普段、遊びの拠点としている児童公園のヤマモモの実を染料に使い、チームウェアとなるTシャツを制作する。

子どもたち自身でヤマモモの実を収穫し、実を活用して染色を行うことで、

自然とふれあい、自然のもつ豊かな色彩に気付く。また、染色や絞りといった伝統的な活動を通して、子どもたちがそれぞれのイメージを出し合ったり、一緒になって工夫したり、つくったりしながら、遊ぶ。

活動の中から「自分でやってみる」という気持ちが芽生え、手順を繰り返す中で、自分に自信をもつことができる（自己肯定感が育つ）ことを期待した。さらに、「友だちと協力して〇〇すれば、□□になる」といったように、「こうするとこうなる」を予想して動くことができるなど、イメージや創造性をひろげ、より主体的な活動なるよう心がけた。

#### 活動のねらい

- (1) 身近な自然に触れ、植物の色や形、変化などに気付き、季節の移り変わりに興味や関心をもつ。
- (2) 造形あそびを楽しむ中で、友達と一緒にやり遂げる楽しさ、喜びを経験する。
- (3) 主体性を尊重し、小さな成功体験を積み重ねることで、自己肯定感を育てる。

#### 対象

3歳児 12名

#### 活動の様子

- (1) 子どもたちを取り巻く自然（活動の環境）

日々子どもたちが通園し、散歩や遊びに行く場所のひとつに、児童公園がある。

この公園は、敷地は約 1,000 平米(50m × 20m)と広くはないが、キャッチボール、サッカー、鬼ごっこなどができる樹木に囲まれた広場があり、通路をはさんで、3～5 歳向けの遊具(滑り台、砂場など)が備えられている。公園全体は椿の木に囲まれているが、通路に沿ってクヌギやマツ、ヤマモモの木が植えられている。冬の雪遊びや椿の木登りをはじめ、四季を通して、子どもたちはこの公園で遊んでいる。



写真 1 屋下がりの児童公園

今回、活動に使用したヤマモモの実も、この公園に植えられた 2 本のヤマモモの木のもものが中心となる。この木の実は直径 1.5 cm と小粒であるが、例年、数多く収穫できる。さらに、公園の近くの集合住宅敷地にも、ヤマモモの木が一本あり、こちらは実の直径が 3.0 cm と大粒ではあるのだが、交差点の角に植えられているため、実の半数は道路に落ち、車に轆かれてしまうため収穫できない。

これらのヤマモモの実は、例年 6 月下旬から 7 月初旬にかけて紅く熟し、食用となる。樹皮は生薬として古来より使わ

れるだけでなく、奈良時代から染料としても活用されている。実は食用として、平安時代には、山城、大和、摂津などから献上果物「楊梅」として差し出されたこと『延喜式』に記されている。アジアに広く分布する樹木ではあるが、古来より日本人の生活にも根付いた、伝統的な植物であるといえる。

## (2) 子どもたちとヤマモモの実との関わり

6 月上旬、ヤマモモの青い実が大きくなり始めると、木の下を通る子どもたちの目が、輝き始める。収穫を楽しみにしているのである。6 月下旬になり、散歩の途中、集合住宅の前の道路が赤く染まっているのを発見すると、歓声が上がり、誰からともなく、走り出す。その時が、収穫が始まる瞬間である。熟したヤマモモの実は、枝から道路にこぼれ落ち、その実を車がひきつづし、道を赤く染めるのである。

子どもたちは、道には落ちているものの、まだ原形をとどめているヤマモモの実を拾い上げる。5 歳頃までは、熟して落ちた実のきれいなものを食べるが、年齢が上がるにつれ棒や虫取り網を用いて、枝に残っている実を落とそうとする。体力がついてくると、木に登ろうとするが、最初の枝まで 2m 近くあるため、たどり着くのは難しい(大人でも、少々手こずる)。子どもたちは、知恵を絞り、話し合い、道具を使って、なんとかヤマモモの実を手に入れようと工夫している。

最初につぶれかかったヤマモモの実を手にした子どもは、その手にヤマモモ

の赤い果汁がべったりと付いているのに気付く、目を丸くし、喜びの声を上げる。その手を自分の上着で拭うが、手に付いた赤い色はそんなことではとれない。逆に上着までもが、赤く染まる。その赤い色を見て、さらに子どもは、喜びの声を上げる。子どもにとって、ヤマモモの実で、自分や服が赤く染まる、という事は、初めて体験する、大きな発見なのだろう。



写真2 ヤマモモの実

収穫2日目になると、子どもたちの中から「あつめる たび(旅)にしよう」という、キーワードが生まれる。普段の生活のなかで、リーダー性を発揮している子どもが先頭に立って、ヤマモモの実を集めるために、まわりの子どもたちに声をかけ始めた。他の子どもたちも「たびにしよう!」「いっぱい あつめる!」と、口々に言いながら、ヤマモモの実を集め始めた。全身を使った遊びを通して、友だちと一緒に活動することで、体を動かすことの楽しさを知り、味わうことができるようになってくる。特に、いままで集団の中で活動する機会が少なかった子どもにとって、信頼できる大人(保

育者)のそばで、共通のキーワード「あつめる たびにしよう」を口にしながら活動することは、安心感と達成感を同時に味わうことのできる経験になったと考えられる。このような経験を重ねることにより、自分の活動に自信をもって取り組んでいこうとする姿が見られるようになった。

収穫3日目になると、ヤマモモの実の多くが熟し、遠目からも道路が赤く染まっているのが見えるようになった。「あつめる たびにしよう」というキーワードを積極的に口にだし、活動の中心となっていた子どもたちは、赤く染まった道路に向かって力いっぱい走っていく。そして、たくさんの実が落ちているのを発見し、大声で後ろから歩いてくる子どもたちに、呼びかける。前日の経験から、ヤマモモの実のおいしさを発見した子どもたちは、我先にと、ヤマモモの木の下に走っていき、目についた実を食べようとする。子どもたちの中には、ヤマモモの実の汚れを気にする子どももおり、つぶれていない実や汚れのついていない、落ちたばかりの実を探す子どももいる。道路に落ちている実つぶれていたり、原形をとどめていないものもあるが、側溝や落ち葉(常緑樹の落葉は晩春から初夏のものが多い)の上に落ちている実は、原形をとどめ、汚れも付着していない。そうやって、思い思いに実を集めているうちに、子どもたちの中に自然に、拾った実を集める子ども、集めた実を入れる袋をもつ子ども、というように役割

分担ができてきた。やがて、落ちている実が少なくなると、今度は枝についている実を、何とかして収穫しようとする子どもが出てきた。木に登ろうか、何か棒のようなもので実を落とそうか、知恵を絞って必要な道具や方法について話し合う子どもたちの姿がみられた。道具を使うだけではなく、大人に肩車をしてもらい、その肩の上で棒を使って、より高いところに実っているヤマモモの実を落とそうとする子どもも現れた。また、道具にも、落とすために長い棒だけでなく、ほうきを使う、虫取り網を使う、椅子にのぼる、おんぶ、肩車、というように様々なヴァリエーションが生まれ、何とかしてたくさん集めたいという気持ちが高まっていく。すると、こんどは、だれが肩に乗せてもらうのか、より効率よく実を落とせる道具を、だれが使うのかで言い争いになる。そこで、保育者も支援に入り、友だちとの活動の中で自分の思いや気持ちを言葉で相手に伝えたり、友だちの思いを知ったりする。このような活動を通して、自分の思いや欲求を、人との関わりの中で表現していくことを身に付けることができてきたと考える。さらに、活動の中で、順番を守ること、汚れないように道具を使うこと、汚れてしまった道具はきれいにして返すこと、など、集団で活動するためにはルールが必要であることにも、気づくことができた。



写真 3

「いっくよ〜！」(虫取り網を使って)

収穫したヤマモモの実は、5kgになり、染色の日まで冷凍庫に保存した。自分たちが収穫したヤマモモの実、という意識と、冷凍室がいっぱいになっているという視覚的にも満足できる状況に、子どもたちは大喜びをし、大人たちに、誇らしげに報告する姿が見られた。染色まで、大切に保存しようという気持ちも強く、実の観察のために一時的に冷凍庫からヤマモモの実を出した時も、「早く、戻して〜！とけちゃうよ〜！」と大人たちに訴えていた。

(3) ヤマモモの実を用いた染色について  
(草木染)

子どもたちは、身の回りのものに触れ、体中の感覚を使って感じ取りながら育っていく。子どもの身近にあり、親しみを感じる材料を用い、発達段階に則した作業の過程をふまえた「造形あそび」を通して、発想や構想の能力が高まり、創

造的な技能を十分に働かせることができるようになる。

友だちと協力し、自分たちで収穫したヤマモモの実を用いて染色を行う。実が熟すまでの過程をよく知り、知恵を出し合って収穫したヤマモモの実を使用する、ということで、子どもたちは前日から「明日、そめそめ（染め染め）するよね～」と語らい、ワクワク感をもって活動に取り組もうとしていた。

【染色の工程】

|   | 工 程         |
|---|-------------|
| ① | 地入れ         |
| ② | 色素の抽出       |
| ③ | 染めの準備(絞り作業) |
| ④ | 染浴による染色     |
| ⑤ | 乾燥          |

① 地入れ

染めムラができないよう、あらかじめ布を 40～43℃の湯につけ、水分を含ませておく。

② ヤマモモの実からの色素の抽出

ヤマモモ 5kg に対し 2L の水を使用する。全体をもむようにしてつぶし、いったんザルと水切りネットで漉す。ザルに残ったヤマモモを、さらに 2L の水の入ったミキサーに入れ、粉碎し、再度ザルと水切りネットで漉す。合わせて約 7.5L の染液が抽出できた。



写真 4

「こんなにあつめたもんね♪」

活動のはじめに、みんなで収穫したヤマモモの実を、たらいに入れる作業を全員で行った。たくさんの実を集めたんだ、という充実感と達成感を感じている様子が見られた。満面の笑みを浮かべ、互いに「ぼくたち、こんなにあつめたもんね」「すごーい、よね」と、誇らしげに感想を言い合っていた。「これをつぶして、染める液をつくります」と、作業過程について説明すると「えー！！つぶしちゃうの!?!」「あかいから、きれいだよね!」「ジュースだよね!」「どうするの?!」と、様々な声上がり、期待感があふれてくるようだった。

タライに入れたヤマモモの実を、実際に手でもみ始め、つぶし始めると、その作業に夢中になっていた。手で握り込むようにつぶしていたが、思うようにつぶれないでいると「クルマみたいに、ひきつぶしてしまえ!」とあって、タライに入り、あしで踏みつぶす工夫をする子がでてきた。大人や、まわりで見ていた上の年齢の子から「たくさん、つぶれるね

え」「よく考えたねえ」と、声をかけられると、誇らしそうに大きく足を動かしていた。また、「うまくつぶせないなあ」と、こまっている子どもには「あしのね、かかどを使って、ぐりぐりつぶすんだよ」と教える姿もあった。また、「たねが、ちょっといたい」「こんなに、まっかになったよ」「ヤマモモの、いいにおいが、いっぱいだね!」というように、全身を使って、ヤマモモの実から自然を感じ取っていた。

### ③ 染めの準備（絞り作業）

Tシャツに模様ができるよう染めの準備を行った。「お花のような色だから、お花のかたちがいい」と、絞りによる表現を子どもたちが選択した。作業としては、輪ゴムを使って、生地をくくっていくのであるが、3歳児には難易度の高い作業となった。板を用いた絞りや、ろうけつ染めなど、他の技法を用いた方が発達段階には見合った作業になったのではないかと考える。しかし、作業の最中には、自分で固定できない部分を「おねがいします」と、年長の子どもや大人にお願いに行ったり、「こうするとね、（輪ゴムが）とまるんだよ」と、くくりが甘いなりにも絞りの形を整え、くくりのコツをまわりの子どもに教えたりしていた。発達段階に応じた作業内容を準備するのも大切であるが、あえて、より難しい作業に挑戦することで、協力し合ったり、支援を求める姿勢を学んだりするのも、造形あそびの良さであると感じた。



写真 5

「こうするとね…」(5歳児による絞り)

### ④ 抽出液で染浴をつくり染色

「どうして、赤い色がつくと、とれないの？」

ヤマモモの実の収穫をおこなっているときからの、子どもたちの最大の疑問が、この疑問であった。

科学的に言えば、植物の細胞核内にある DNA に書き込まれている遺伝子情報の中に酵素があり、その酵素の種類「二次代謝産物」の中に天然由来の色素がある。色素は、i) 適度な親水性をもち、ii) 可視光での反射特性があり、iii) 繊維分子の官能基と各種反応しやすい官能基をもっており、Tシャツの繊維分子の官能基と結合することができれば、染色ができる、ということである。子どもたちに染色の原理を説明するために、この官能基を「手」に例えて説明した。

「ヤマモモの実をしぼると、赤い汁になるよね」「うんうん」子どもたちは、頑張った自分を思い出し、誇らしげな顔をしながら話を聞いている。「この赤い色は、虫さんの目で見るとひとつひとつの丸い粒で、ちっちゃな、目に見えない手

をもっている」「そして、Tシャツは布  
できてて、布は糸でできてるんだけど、  
その糸はやっぱり小さな丸い粒ででき  
てて、やっぱり、ちっちゃな、目に見え  
ない手をもっている」「Tシャツをヤマ  
モモの汁に入れると、赤い色の手と、T  
シャツの手が、みんな、手をつないで握  
手する」「そのあとで、しっかり手をつな  
いでいられるように、化学の粉を入れる  
と、ヤマモモの色がTシャツについたま  
んまになって、とれなくなるんだよ」。子  
どもたちが、普段の生活の中で使ってい  
る言葉を用いて説明すると、「手をつな  
ぐ」イメージが、子どもたちの意識にび  
ったりとはまり込んだようである。「色  
と、布は仲良しなんだね!」「化学の粉、  
って、けんかしないように、あるんだよ  
ね」「ずっと、手をつないでいられるとい  
いよね」と、色彩の定着について、自分  
の感想を話し出した。

染色の作業としては、抽出液 5L に 1L  
の水を加え、6L の染浴をつくる。残りの  
抽出液は染色の工程で、染まり具合に応  
じて加えていく。急激に染液が染み込ま  
ないよう地入れをしたTシャツを、持ち  
上げて軽く水を切った状態（絞らない）  
で、染液に入れ、全体に染液がなじむよ  
う約 15 分間、繰る。絶えず液の中で布を  
動かし、気泡が入らないよう気をつける。  
布は折れ目がついたり、空気が入ってい  
たりするとムラになってしまうので、ゆ  
っくり、何度も丁寧に繰る。子どもたち  
は、手を赤く染めながら、「わたしがや  
る!」「わたしも～」「ぼくのTシャツ、

とって～」と口にしなが、体が先に動  
くようであった。



写真 6 「色がついてきた～」

染液を軽く切った後、布についた余分  
な染液を、水でさっと洗い流す。

別容器に 200cc の熱湯に明礬大さじ 2  
はいを溶かし、その溶液を、2.8L の湯に  
溶かし込み（明礬は低温の湯に溶けにく  
いため）、媒染浴をつくる。Tシャツを、  
染浴で繰ったのと同じ要領で、約 10 分  
間、媒染浴の中で繰る。染色後の水洗い  
とは別容器の水で、流すように水洗いを  
する。

染浴、媒染浴の工程を二回、繰り返す。  
最初から高い濃度の染液で染浴を行う  
と、ムラになりやすいので、回数を重ね  
るごとに濃度を上げていく。このとき使  
った染浴から 1L をすて、新たに抽出液  
1L を加えるようにする。三回目の媒染浴  
を終え、水洗いをした後、さらにもう一  
度、きれいな水で丁寧にTシャツを洗う。

抽出液は翌日まで持ち越してはいけ  
ない。さらに濃く発色させたいときは、  
最終の水洗いの前に中干しを行い、翌日  
以降に、抽出の工程から再度繰り返す。



### ⑤ 乾燥

乾燥によって最終的に色素が定着する。きれいな水でよく布を水洗いした後、軽く絞り、日陰の風通しの良い場所に広げて干す。

ロープを張り干し場を作ったが、子どもたちは自分の力で、水を含んだTシャツをひろげ、ロープにかけようとしていた。奮闘の末、Tシャツを干し終わると、干し場いっぱい広がっているTシャツを、「Tシャツでいっぱいだよ！」と、まわりの大人の手をひっぱっていき、見せようとする姿が見られた。友だちと協働して活動に取り組み、干し場いっぱいに広がったTシャツをみて感じた達成感を、共有し、伝え合う姿であると考えられる。

## 子どもの活動と造形あそび

今回の活動を通して子どもたちは、(ア)知識及び技能の基礎＝ヤマモモの実の収穫を通して、自然の中での植物の成長に気付くとともに、その実を生活の中に染色として生かすことを知り、自分の力でつぶしたり、干したりすることができるようになった。さらに、なぜ、布は染まるのだろうという疑問を通して、科学的な理由について探求する姿勢も見られた。

(イ)思考力、判断力、表現力等の基礎＝ヤマモモの実を収穫するなかで、道具を使うことを考え、その使い方について試行錯誤しながらより良い方法について

工夫することができた。また、ヤマモモの赤い色から連想し、お花のような模様にしたという思いをもち、その表現を追求しようとする姿が見られた。

(ウ)学びに向かう力、人間性等＝まわりの仲間と、ヤマモモの実を収穫するなかで、情報や方法について共有し、染液抽出のヤマモモの実をつぶす作業や、干し場にTシャツを干す作業を協働で行う姿がみられた。また、よりたくさんヤマモモの実をとる方法や、役割分担をすることで効率的に収穫できる、などの追求を行うこともできた。

活動全体を通して、子ども同士が話し合い、時には大人を巻き込みながら、主体的に活動することができたと考えられる。題材を、チームウェアであるTシャツとしたことで、より身近で、自分たちの生活に結びつく主体的な「染色あそび」となった。



写真 7 陽のひかりを浴びて

### 最後に

今回実施した「染色あそび」は、「造形あそび」の一例であると考えられる。「造形あそび」は、活動内容の変化の自由度や幅、

活動の発展性など、多くの面において、子どもたち自身に開かれている活動である。子どもたちは、「造形あそび」の中で、材料や場所、行為などの様々な資源とかかわり、感触、匂い、色やかたちを楽しみ、試行錯誤や共同作業を行いながら、資質や能力を発揮していく。子どもたち自らが「唯一の自分」を生み出し、「今」「ここ」で「唯一の自分」自身を更新していく。

幼児期の子どもにとって、生活の中から生まれるあそびは、より深くあそび込むほどに「造形あそび」となり、子どもの資質や能力を発揮する「造形」活動となる。この生活に基づいた「造形」活動は、仲間や大人（保育者）への信頼感や協働する喜びにつながり、自己効力感・自己肯定感・意欲を育てていくと考える。さらに、生活に結びついた「造形」活動は、子ども自身が文化を獲得し、自己の可能性を開くことを大切にしたい「環境を通じた教育」につながるものであると、考える。したがって、「造形あそび」は、その活動を通して、「生活」と「造形」を結びつけ、子どもの豊かな心を育むとともに、幼児期に育ててほしい力を育む活動であるということは明らかである。

今後の課題として、幼児教育が子どもの連続的な発達と、小学校以降の生活・学習の基盤の育成につながることをふまえて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うような、幼児の生活のなかから生まれる「造形あそび」にするための題材の選択や、支援の方法を考えて

いきたい。また、幼児の自発的な活動としての遊びが、心身の発達の基礎を培い、小学校までの継続した主体的な造形活動になるよう工夫していきたいと考えている。

### 参考文献

- 青木正明.(2019).天然染料の科学(pp2-20).日刊工業新聞社.
- 野田隆弘.(2009).本学植栽の樹木の染色特性(pp93-98).岐阜市立女子短期大学研究紀要 58 輯.
- 村田夕紀.(2012).造形あそび 実践ライブ(pp94-99).ひかりのくに.
- 吉岡幸雄・福田伝士.(2016).自然の色を染める(pp44-53).紫紅社.